

黙想 旧約聖書「十戒」(1)¹

左 近 豊

序

「十戒」は、旧約聖書でも新約聖書でも、神様から与えられた大事な教えとして何度も触れられます。モーセを通して与えられ（出エジプト20章、申命記5章）、預言者たちが規範とし（ホセア4:2やエレミヤ7:9など）、詩編の祈りの基ともなり（詩15編や24編など）、主イエスが「一点一画もすたることなく」徹底されるべき教えとして「山上の説教」で語り掛けられたものでもあります（マタイ5章以下）。そしてキリスト教会は、「使徒信条」「主の祈り」と共に「三要文」として重んじ、代々の聖徒とともに告白する信仰の枢要に据えてきました。

では、このようにして継承されてきた「十戒」を、私たち現代を生きる者は、どのように次の世代へとバトンタッチしてゆくのでしょうか？ただオウム返しに暗記して口から口へと伝えるのではなく、親鳥が口移しに魂の糧を雛に与えて、それが口から心へ、心から魂へと染み入り、「十戒」がその時代に生きるものの内にかみ砕かれて血肉とされ、そうやって「十戒」の信仰に生きる神の民とされるためには。そして神の民として定められたレースを、スタートでありゴールであられる主イエスを目指して忍耐強く走り抜き（ヘブライ12章、IIテモテ4:7など）、また次の世代へと「十戒」を通してタスキをつなぐものとされてゆくためには。その走るべき道程として与えられた21世紀の信仰

1 本稿は、『日本基督教団福音主義教会連合・教会学校教案誌』（2017年度）に11回にわたって連載した「テキスト研究・十戒」に加筆修正したものの一部である。

の馳せ場にあつて、「十戒」をご自身の指で記された父なる神（出エジプト 31:18）、「顔と顔とを合わせて語りかけられた」主（申命記5:4）を日々新たに知るものとされ、さらには、「十戒」を唯一完璧に生き抜かれたにも関わらず、そうできない私たちに代わって「十字架」に死んで審きをその身に負われたキリストを仰ぐものとされ、罪によって失われた神の似姿（かたち）を回復すべく、栄光のみ姿へと造りかえてくださる聖霊の働きを讃えるものとされるためには。言い換えれば「十戒」を通して、**罪**を知り、**義認**の福音を仰ぎ、**聖化**の御業を讃えるものとされるためとも言えるでしょう。

旧約聖書、新約聖書、そしてキリスト教の歴史を貫く救いの道程を歩む私たちにとって、「十戒」は、いかに的外れな歩みをしてしまっているかを厳しく問いただすような懲戒としてのみ捉えるのではなく、もっと豊かに用いられるものなのです。戒めによって萎縮させることが律法の本来のあり方ではなく、「神の似姿（かたち）」として造られた人間の本来のあり方へと解き放ち、神の憐みをもって隣人の痛みに魂を震わせ、神の愛をもって赦すものへの招きが律法にあることを「律法の完成者」であられる主イエスは示されたのですから。「十戒」の言葉は縛るものではなく翼を駆って上らせるものと言えます。どこに上りゆくか。それは十字架に挙げられ、陰府に降られ、死人の内よりよみがえり、天に上げられた主イエスに向かって「**栄光から栄光へと主と同じ姿に造りかえられてゆく**」（II コリント 3:18）道行きの先なのです。召してくださった神に相応しく「**聖なるものとなりなさい**」との勧めに従って、主なる神と「**顔と顔とを合わせて**」（I コリント 13:12）お会いする終わりの日に向けて、「十戒」は、私たちが世に刻む一步一步を整え、主の再び来たりたもうを待ちながら備えをする導き手とされているのです。罪人でありながらも義とされた救いの喜びを味わうほどに、主と再びまみえるべく、内なる人、日々新たにされ、聖なるものとされ、栄光から栄光へと主イエスキリストと同じ姿に変えられてゆく道行きを聖霊によって促される時、「十戒」は救いの完成に向けて御許に通ずる救いの道筋を指し示すものとなるのです。

ですから「十戒」を学ぶことは、十字架と復活によって律法の完成者となら

れた主を思い起こしつつ、凱進行進の先頭を行かれる主の後ろ姿を見る眼差しを清め、踏み出す一步を直くし、御声を聴く耳を開き、吹きかけられる聖靈の息吹を魂いっぱい満たす助けとなるのです。

1、奴隸の家から導き出した神

「十戒」は、それだけ切り出して奉じ、暗記することも教会教育の中でなされてきましたが、常に、その置かれている聖書の文脈や救済史の文脈に立ち戻って、「十戒」を通して語られる主の熱情に打たれる経験が大事だと思うのです。それは「十戒」の冒頭に刻まれている言葉「私は主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隸の家から導き出した者である」が示していることでもあります。この一文は、後に掲げられる一つ一つの言葉の基であり、要であり、紐帯となっているのです。そのことを真剣に受け止めたユダヤ教の数え方では、これが第一の言葉とされて、「10の言葉」（ヘブライ語。因みにギリシャ語「デカ（10）ログ（言葉）」も「戒め」という言い方ではない）の筆頭に数えられていることに改めて留意したいと思います。神が告げられた「**これらすべての言葉**」の最も重要な最初の「**言葉**」なのです（出20:1）。

「十戒」を語られている主（YHWH）が、聴く者たちの前にご自身をあらわされ、名を告げられ、救いの御業を思い起こさせます。あたかも新約聖書で主イエスが一言一言、噛んで含めるようにして「主の祈り」を教えてくださいましたように。これに続く言葉の一つ一つは、他でもない、何の功（いさお）もないにもかかわらず、苦難の淵から叫ぶ声に、腸ちぎれんばかりの憐みをもって応えられ、降って行って救う決断をされた主なる神が語り掛けられたものであることが分かります（出エジプト3・7-9参照）。この神に向き合うにふさわしい者として、この御業に倣うものとして、この救いに応答するものとして、「十戒」の言葉は聖書の民を招いていると言えましょう。

その招きは漠然と一般的なものではなく、面と向かいあう親しみを込めた語りかけとなっており、招くものと招かれる者の間に救いと恵みが介在する、密

接な関係が結ばれていることが前提となって「わたしが主（YHWH）、あなたの神」と告げられるのです。大観衆相手に声張り上げて語られているのではなく、膝詰め目を見て懇ろに語りかけられているかのように。そしてその関係は形式的で漠然とした曖昧なものでも、空想上のことでもなく、歴史に刻まれた苦楽と辛酸をなめた末の、酸いも甘いも噛分けた同士の間にも幾重にも結ばれたものと言えます。友情にも濃淡があるでしょうが、破れも傷も抱えてなお切れることのない関係となぞらえることもできるかもしれません。

誰かの、そして何かの奴隷であること、考え方も価値観も美意識も、見るべきものも聞くべきものも選択肢が与えられない、あるいは自らそれらを抱き、選びとることに恐れを覚えて身を固く小さく屈めて生きなければならない現在が、過去のみならず未来をも閉ざして、自らの力では突破できない絶大な重苦しい空気に押しつぶされているとしたら、それが聖書では「奴隷」であり「奴隷の家」に生きることなのです。「エジプト」なる場所は21世紀の日本の学校にも社会にも世界にも大いなる力をもつてのしかかっているとしたり、「十戒」は、命すり減らして血をにじませるほどに声にならない叫びをあげている若い魂に、今語ることを託されている神の招きの言葉なのではないでしょうか。「約束の地」、来るべき「新しい天と地」を目指して歩みゆく群れ、神の支配される御国の先取りである礼拝共同体（教会）への招きとして。「私は主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した者である」。

2、「あなたには、私をおいてほかに神々があってはならない」

マタイ4:1-10でイエス・キリストが荒れ野で退けられた誘惑は、姿を変え、声色を変えて、今なおしぶとく打ち寄せる混沌の海のように、神の国の岸辺を食んでいるともいえるでしょう。「退け！サタン」と言われた主の言葉を、主の御体なる教会、そして信仰共同体（キリスト教主義学校も）は、聖霊を通して聞くだけでなく、語る務めも与えられています。

繁栄であれ富であれ、健康であれ安全であれ、関心であれ評価であれ、家族

であれ、何らかの成果や見返りを求める抗いがたい誘惑は信仰にも常にあります。聖書ではヨブ記が真正面から扱った問題でもありました。ヨブ記の主人公ヨブがあまりに無垢で、正しく、神を畏れ、悪を避けて生きてることに、どうにも落ち着かない、斜に構えてすべてを疑わずにおれない、批判的に検証せずにおれないものとして登場する近代的な視点の持ち主であるサタン（原語では「検証するもの」）。人間ごときは、何らかの見返りがあるから信仰しているだけだ、つまりは、その「何らか」こそが神以上に求めているものじゃないか、と見透かしたように冷笑的なサタンの確信。どこか引きずられそうな、そのサタンの冷たい笑いに胸を張って熱く、「否！退け！」と語られた主イエスは、「十戒」の信仰こそがその拒絶の基となることを示してくださっています。

マタイ4:10で主イエスは申命記6:13を引用しておられます。何かのために、何か見返り求めて礼拝することは、あたかも横目で何かを追いながら、あるいは向かいあっておられる主の眼差しを無視して、肩越しに視線をずらし目移りさせ、視線を散らすものかもしれません。そうしてみるとサタンが求めていることは、なんとも悲しく空しい響きにも聞こえてきます。どうせ人間なんてご褒美なしには何ものであれ尊ぶはずない、と。だからこの世の繁栄を見せて、あれをあげるから私を拝め、愛せ、仕えよ、と迫り、詰め寄る。でも御子である主イエスは、父なる神、そして神の民への熱情を知っておられるから、喜びも悲しみも叱咤も慰藉も嘆きも賛美も的外れな歩みも、その罪への怒りも、赦しも、愛と義の漲る何千年にわたる聖書の民との紆余曲折、荒れ野の40年を経て、約束の地での恵みと裏切り、山あり谷ありの交わりの歴史を歩み通してきた父なる神の御心を携え降り、その足あとをご自身、人となられて地に刻まれるゆえ、十戒の信仰に言い表された、「わたしをおいてほかに」、何らほかに目的なしに、見返りなしに、ただ真っ向から向きあわれる神との関係がどんなに深みにしみわたる喜びであるかを嘯みしめておられるから、サタンの冷めきった悲しみを退けられたのです。私たちの内なるサタンのささやきをも。「退け、サタン」と誘惑を断ち切ってください。「罪と戦って、血を流すまで抵抗したことがない」（ヘブライ12:4）私たちのために身を挺して十字架へと進みゆ

かれたのです。その礎にあった「わたしをおいてほかに神々があってはならない」との言葉。

「ほかに神々があってはならない」となっていることも大事でしょう。あれかこれかの二者択一にとどまらない、**主なる神**をもろもろの多くの選択肢の一つにしてしまうことが、どれほど人間の魂を蝕み、すり減らし、疲弊させ、生きた屍とする不幸であるか。私たちがそれに気づかない先から、魂千々に乱れて叫びをあげる前にすでに、未だ気ままに的外れな歩みをして立ち止まらない折に、罪のもたらす報酬に無頓着に魂が死に至る病に鈍麻なままである時に、神は、「はらわたちぎれんばかりの憐み」をもって、懷を裂いて独り子なるキリストを失ってまで、世を愛し、私たちを慈しまれた。一体この神と何を並べ、比べ、目移りし、選択肢としうるだろうか、この方に代わりうる、並べうる（選択肢となりうる）、対抗しうる何ものかなどあるだろうか？「否、ほかにはありえない」。それが、この憐みに裂かれ、慈しみに富み、愛に溢れた神との出会いに打たれ、この主を証ししてきた神の民の応答なのです。

モーセを通して「聞け、**我らの神、主は唯一の主だ**」、こんな交わりを貫かれた神は他にいないではないか、「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、**あなたの神、主を愛しなさい**」と申命記（6:4以下）が十戒の信仰に立って語る時、私たちがこの神を選んだのではなく、むしろ先ず私たちを選び、憐み慈しみ愛された神を思い起こすのです（サタンを退けられた主イエスの言葉も含む申命記6:10-16も読んでみてください）。

聖書の証ししている神は、人の苦しみをつぶさに見る、叫びを聞く、その痛みを知る神。人が自ら苦しみを克服しながら自力で登ってくるのを待つのではなく、居ても立ってもいられずに自ら降って行き、救い出す神。そして共にいる神。

さらに、自らの名を問うモーセに「わたしはいる。わたしはいる、という者」と答えられる。これは、誰とも関係なくとにかく存在するのだ、という有無を言わさぬ言い方ではありません。むしろ問われて答え、痛みを知り、低きに降って、「**必ずあなたと共にいる**」という関係を大事にされる、関係に生き

て働かれる神だということ。それは出会っても気に入らなくなったら、ハイおしまい、という刹那的な関係ではないのです。初めから終わりまで、生まれた時から担い、個々人も、また共同体も、老いて白髪になるまで背負う、造った以上は担い、背負い、救い出すのだ（イザヤ46:3-4）と約束され、その約束に徹頭徹尾責任を持ち、誠実でありつづける関係なのです。

相手が奴隷であろうと、不自由になろうと、力が衰えようと、病に伏していようと、一緒にいることに何の得が無くても、決して見捨てない。教会の結婚式でなされる誓いの言葉の通り、相手が健やかなる時も病める時も、喜びの時も悲しみの時も、富める時も貧しい時も、相手を愛し、敬い、慰め、助け、まごころを尽くす愛の原点は、この神の愛と約束にあるのです。約束はすることはできても、その約束を生きることはたやすいことではありません。けれども聖書の神は、人間には難しくても、出会った相手を決して見捨てることなく、その関係に生き続けられ、これからもそうであることが聖書に証しされています。

そのような神との関係に割って入り、比べ得るような存在が他にあるだろうか。「ありえない」「そういうことは起こりえないでしょう」という否定です。それは命令で縛る縛らない、強いか弱いかなど、遙かに超えて、深い関係を重ねてきた両者の間に、もう言うまでもないことです。忘却しているなら、思い起こさせるのです。知らないならば、追体験でわがものとさせるのです。全てを傾けて、低きに降って、どんな時にも約束を貫き、誓約と契約をもって、誠実な関わりの中で共にいる神の御前に立ち帰らせるのです。

「あなたには、私をおいて他に神々があってはならない」この言葉を聞く時、わたしたちは、破たんした人生を持って余していたモーセに出会われ、生きる目的を見失って混沌の中を彷徨う人々の魂に語りかけられ、衣食住を見返りに「仕えよ」（ヘブライ語では「礼拝せよ」という意味もある）と命じる、この世の「神」「ファラオ」に魅せられ、つぶやき、不平を漏らす民に熱情をもって臨まれ、荒れ野の窮乏と誘惑に血を流すほどの抵抗もできない者にとっての命の源、魂の礎が、どなたであるかを思い起こすのです。そしてその先に、はつき

りと、荒れ野で悪と戦い、十字架で罪を滅ぼし、復活によって死に引導を渡されたキリストが、私たちに先立って「ただ主に仕える」歩みを、そのみ姿もって示され、従う者をご自身の栄光の姿に変える**聖化**へと“いざない”、招いてくださっているのを仰ぎ見るものとされるのです。

3、「あなたはいかなる形も造ってはならない」

ここで問題となっているのは、しばしば偶像崇拜のこととされています。この神様のほかの、いろいろな異教の神々の像を刻んで、森羅万象を形にして神として拜んだりひれ伏したりすることはありえない、と。確かにそのように読む伝統があります。第一の言葉「わたしの他に、わたしと並べて他に神々があってはならない」を言い換えるようにして「いかなる他の神々の像を造って拜んではならない」と読む読み方です。ですからその場合、今日の言葉は第一戒の後半部分として数えられる場合があるのです。たとえばカトリック教会やルター派の数え方では、今日の言葉は第一の戒めに含まれているのです。カトリックの聖堂やルター派の教会の礼拝堂に、いろいろな聖人の像やマリアの像、十字架にはイエスキリストの像がかかっていることがあります。ほかの神々の像はあり得ないものであるけれど、聖書の神様の像はあってよい、と考えるからです。聖書の神の像ならば偶像ではないから、と。第一の言葉と続けて一まとめに読めば、確かに、あなたの人生に、救いをもってコミットされている神様と並べて他に神は必要あるだろうか、ましてやそういう他の神々の像を造って拜むなどということはあり得ないでしょう、となります。ここで問題とされているのは、聖書の神以外の神々の偶像を刻んで（彫って）礼拝することだ、と。

ただ、この第二の言葉を第一の言葉とつなげて一息に理解するのではなく、別の教えとして一息おいて読む読み方もあるのです。改革派、宗教改革者でもカルヴァンの流れを汲む教会では、第二の言葉は第一の言葉と独立させて聞くのです。「あなたはいかなる形も造ってはならない」、そこには聖書の神の像

だつて入ってくる。聖人はもちろんのこと、イエス・キリストの像だつて刻まない。ついには十字架さえ礼拝堂の中には置かない教会も少なくありません。偶像崇拜、といったとき、他の宗教の神々や仏像のことをどうこう言っているのではなく、まず何よりも私たち自身の神様をとにかく偶像化しない、ということとして聞いてきた。「生ける神の神殿」である教会にはいかなる「偶像」もそぐわない、とIIコリント6:14-16でパウロも語っています。「生ける神の神殿」である教会にあっては、聖書の神であっても形にしない、何かの像に刻まない。その信仰に徹する。その結果として、み言葉に集中する姿勢が整えられることを重んじる。説教と聖餐に表された神の言葉を通してのみ神と出会い、他の何にもよらずに、語りかけられるみ言葉によって神がいますことを知り、礼拝をささげるものとされていることの豊かさと恵みを味わうものとされるのだ、と。

ハイデルベルク信仰問答が、この「十戒」についても取り上げて教えています。

「問96 第二戒で、神は何を望んでおられますか？

答 わたしたちがどのような方法であれ、神を形づくったり、この方がみ言葉において命じられた以外の仕方では礼拝してはならないということです。」

そして問98への答えの中に、神は、

「ご自分の信徒を、物言わぬ偶像によってではなく、み言葉の生きた説教によって教えようとなさるのです」

とあります。「いかなる像も刻んではならない」という言葉は、何よりも私たちの礼拝と説教に関わるものだという理解が示されています。私たちをまっすぐに神に向かう礼拝者として整え、さらに説教において生きて語られる神の言葉を聞く者へと導くのがこの「いかなる像も刻んではならない」という言葉である、と。

ところで英語では graven image を造らないとなっています。刻まれたイメージさえも、と。刻まれるものは目に見える形だけでなく、つい頭の中で、

心のどこかで、魂において神様たるものこうあるはず、いやこうあるべきだとイメージを勝手に作り上げてしまっていることはないだろうか、と問われるのです。祈る時、そして礼拝のただ中で、私たちの願いや願望や要求に沿って固定されたイメージの中に、神を押し込め、閉じ込めてはいないだろうか、と。意図するとせざるとに関わらず、神を私物化していないだろうか、と。わたしたちの都合に合わせて神のあり方を云々したり、神の業を値踏みするような傲慢に陥っていないだろうか。それがこの第二の言葉が突き付ける問いでもあります。神を、わたしたちの想像力の範囲内に（たとえ限りなく広がろうとも）矮小化する時、何が起こるか。人はその思い描く神に成り代わって語り、行動し、その神の名の下に、その名をかたって正義を振りかざして過ちを拡大してきたことは、聖書の歴史も世界の歴史も証しするところです。赦すより裁き、愛するよりも憎み、和解するよりも争い、そのようにして神の民は、共同体は、誤った神のイメージをそれぞれに胸に抱きながら、礼拝をしながら、そのただ中に破綻してゆく、ということも起こる。共に救われ、共に担われて歩んできた隣人同志が、あろうことか、それぞれの神のイメージを刻みあい、いがみ合いながら。そのようなことがあっていいのだろうか。この第二の言葉はそこにこそ語られるのです。

原文では「あなたはあなた自身のために、刻んだ像を造ってはならない」となっています。誰かほかの人がどうか、というよりも、あなた自身があなたのために神のイメージを造るなどということがあるのか、まさか大いなる救いをあなたとあなたの隣人に実現された神を、あなたのために小さく型にはめてしまうなどということはありませんかと。

あなたは知っているはず、聞いてきたはずではないですか、という語りかけが聞こえてきそうな言い方です。聖書の神は、「(私は) 彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」という誠実な関係を常に契約によって保ち守り続けられる方であって、型にはまったコンパクトな中に都合よく私たちが持ち運びできる神ではなかった。個々人の人生を超えた歴史を縦横無尽に生きて「巡り歩かれる」、その中で、例えばエジプトの奴隷であったイスラエルを解放し、自ら

の民とし、紀元前6世紀にはバビロン捕囚にあって崩おれていた人々を背負い、担う神であったではなかったかと。イザヤ書46章を読んでみますと

「(バビロンの神々である) ベルは身をかがめ、ネボは身を伏せる。彼らの偶像は獣と家畜に背負われる。あなたがたの運ぶものは荷物となり、疲れた動物の重荷となる。彼らは共に身を伏せ、身をかがめ重荷を解くこともできない。彼ら自身が捕らわれの身となって行く。」(『聖書協会共同訳 聖書』より)

とあります。持ち運ばれる神は人にかつがれ、動物に負わされ、重荷となるばかり。しかし

「聞け、ヤコブの家よ またイスラエルの家のすべての残りの者よ
母の胎を出たときから私に担われている者たちよ 腹を出した時から私に運ばれている者たちよ。あなたがたが年老いるまで、私は神。あなたがたが白髪になるまで、私は背負う。私が造った。私が担おう。私が背負って、救い出そう」。

聖書の神は背負われる神ではなく、背負う神、持ち運ばれる神ではなく、持ち運ぶ神。

「あなたがたは私を誰に似せ、誰と等しくしようとするのか。私を誰と比較し、似せようとするのか。……細工師を雇い、それで神を造り、ひれ伏して、拝みさえする。彼らはそれを肩に乗せ、背負って行き、しかるべき場所に据える。それは立ったまま、その場所から動かない。人がそれに叫んでも応えず、苦しみから救ってはくれない。」

けれども聖書の神は「語ったからには、必ず来させ、私が計ったからには、必ずそれを行う。……私の正義を近づけた。それは遠くはない。私の救いは遅れることはない」方である、と。そして新約聖書において、さらにこの神の姿は鮮明に、イエスキリストに現されることになったと証しされるのです。

聖書の証しする神は、ただ高きところに鎮座まします神ではなく、驚く仕方で人の抱く“神”の常識もイメージもかなぐり捨てるかのように低きに降り、神の身分でありながら、神と等しいものであることに固執されずに、かえって

ご自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じものとなり、人間の姿になられ、へりくだって死に至るまで、それも恥多き十字架の死に至るまで、深い人の世の絶望の極みにまで身を投げ出され、人の罪を十字架で担い、背負い、死の縄目を解き放つために私たちに先立って死を死に切ってくださいました。そして復活の命の初穂となられた。これまでの人の世の習いも、神たるものの型をも、徹底的に破られた神を聖書は証ししています。この“**型破りな神**”と出会ったものは、もはや人間が思い描くことのできるイメージに神を限定して、信じる信じないを云々することなど、あり得ない。遥かに超え出た大いなるみ恵みに圧倒される。それがこの第二の言葉の語っていることなのです。ですから、この言葉を読む度毎に、私たちは、型破りな仕方であつて救いを実現されたキリストを、旧約聖書で語られた言葉を完成された主を、思い起こすことになるのです。いかなる像にも、イメージにも刻みえないほどの、ただ、み言葉の説教と聖餐によってのみ、型破りなまでにご自身を投げ出してわたしたちの救いとなられたキリストを、聖霊に助けていただきながら、大胆に仰ぎ見つつ、招きに応えるものでありたいと思います。

4、「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない」

神の名とは？

ある人の名前を聞けば、その人の顔つきや外見だけでなく、一緒に過ごした日々の中で共に泣き笑いし、言葉を交わし、何を尊び、何を美しいと感じ、何に怒り、何にこだわったか、といった内面も含めた、その人との関係の全てが思い起こされることがあります。名前には「人格」が表されるともいえるでしょう。聖書で「**あなたの神、主の名**」を聞く時、「あなた」と呼びかけられる間柄で刻まれてきた神との出会いと、これまでの共なる歩みの軌跡をたどることができるものです。

例えば「**アブラハム、イサク、ヤコブの神**」という呼び方で言い表される時には、信仰の父らを「あなた」と呼んでは、示す地へ旅立たせ、笑いと試練を

通して約束を生きるものとし、祝福の器とし、相競い争う中にも御業と御心を示し、世代を超えて、時代を超えて、歴史を貫いて約束を成就へと至らせられる方であることが示されます(創世記12章以下)。「エル・ロイ」という名で呼ばれる時には、女主人に辛く当たられて、イシュマエルを身ごもって逃げるハガルと出会い、励まし、祝福し、名を呼ばれることを良しとされる方であることが思い起こされます(創世記16章)。また「わたしはいる」という名でご自身を示された時には、モーセを「あなた」と呼んで、民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ叫び声と痛みを、わがこととされ、もう居ても立ってもいられない「降ってゆき、救い出し、導き上る」から「さあ、行け」とモーセを召し、寝ずの番をして出エジプトをなしとげ、混沌の海を割いて道を通し、荒れ野へ、そして約束の地へと、紆余曲折を経て奴隷根性の染み付いた頑なな民と向き合い、糾し、忍耐強く、慈しみをもって、罪と背きを赦しながら、新しい共同体へと造り変えていかれた方であることが示されます(出エジプト3章、34章、民数14章など)。歴史書や預言者では、「主の名」そのものが神ご自身の存在を表すものとして、例えば礼拝の場や神殿が「主がその名を置くために選ばれる場所」と語られています。主の名には、その1人1人と出会われ、葛藤と格闘、恵みと慈しみ、赦しと憐みの関わりを深めてこられた神様が表されているのです。詩編では、感謝の応答として「主の御名」が聖なるものとして讃えられます(詩103、105、106編など)し、賛美と栄光は神の名に帰せられるのです。御名そのものが、生きて働かれる神ご自身として重んじられるのです。

みだりに唱える、とは？

神の御名そのものが生ける神ご自身として大事にされるから、その御名を「みだりに唱える」ことはありえないこととされます。「みだりに」というのはどういう意味なのでしょう？分別なく、思いつきのように乱用、濫用すること、という意味も考えられますが、実は、申命記5章の「十戒」の方では、同じ言葉が「隣人に関して偽証してはならない」(20節)の「偽証」に使われて

いることに注目してみたいのです。それは裁判の場に証人として呼ばれた際に、隣人を貶めるために、ありもしないことや、事実を歪曲して誤った証言をすることに関する言葉です。証言によっては、被告の命が左右されることでもあるので、偽りや歪曲があってはならないことなのですが、そのような場面で使われる言葉が、「みだりに」と訳されて、ここでも使われているのです。「みだりに」には、不当な仕方、本来のあり方を曲げて、内実を伴わない仕方、無為な仕方、と言った意味が含まれていると言えるでしょう。本当の神様のみ旨や御心、出会いや歩み、関係を歪曲し、誤ったものとする証言、証しを口にすること、それが「神の名をみだりに唱える」ことと言えます。

「神の名をみだりに唱える」ことは、神様を不当な仕方、本来のあり方を曲げて、内実を伴わない仕方、無為に口にすることといえるでしょう。神様との関係について偽りの証言をすることとも言えます。それは相手を蔑ろにし、傷つけ、聞く人の中にも偽りを刻み、語る人の信頼性も内実も蝕むものとなるのです。

例えば喜びも悲しみも幾年月、関係を深め、共に歩みを刻んできた大事な人について、その人もその人の名も、ぞんざいに雑に扱うことはあり得ないと思うのです。旧約聖書に証しされる救いの歴史に刻まれた、苦悶の叫びを聞き、その痛みを知り、降ってでも救う御業を起こされ、関わりの途上であって、怒るに遅く、慈しみに満ち、罪と背きを赦される神様については一層そうでありましょう。神様との関係を大事にするとき、神様について、神の名を語る者は誠実かつ真実に証しをする者とされます。神の「似姿（かたち）」として造られた人間の本来のあり方はそこにあるからです。

御子イエスの名

神の似姿（かたち）として造られた人間が、自らの道を的外れに歩む中で、神様との関係も破れ、滅びの淵にひた走るのを、出エジプトを断行され、怒るに遅く、慈しみに富み、罪と咎を赦して来られた神は、ついに独り子なる神を遣わされ、下されるべき裁きを十字架において御子に負わせることで、人間が

自ら解くことのできない罪と滅びの縄目を断ち切って、和解と救いを成し遂げられる決断をなさったことが新約聖書で証しされることになります。主イエスは、この神の御子として、父なる神を十全に現わされる方として、み言葉においても御業においても真実であられた「インマヌエル（神共にいます）」と呼ばれる方であり、「イエス（主は救い）」の名で呼ばれます。その主イエスが、「山上の説教」で、神の御名を誤りなく、曲げることなく、真実に誠実に証しすることについて語られたのがマタイ5・33以下なのです。最も神の名を口にする機会として、誓いや誓約が考えられます。その際に神の名にかけて「誓いを立てる」ことはもちろん、「神の名」を避けたとしても、「天」に賭けても、「地」に賭けても、「エルサレム」に賭けても、天も地もエルサレムも神の居ます所（イザヤ66・1）であり、自分の頭であっても神の似姿（かたち）として造られた神様のものであり、誓うことで神様を利用することに違いはないから、とにかく誓いを退けられるのです。「神の名をみだりに唱えてはならない」を徹底すれば、そうなる、と。被造物を「よしとされた」神様は、その一つ一つを、髪の毛一本一本であっても、一羽の雀さえも愛し、慈しんでおられ、その一つも落ちることを無為にはなさらない、それほどまでに関わりを持たれる神様を、私たちは全身全霊をもって証しするものとされているから、「はい、はい」「いいえ、いいえ」以上に語ることは、蛇足となり、曲解と虚構を生み出すことになってしまうのだ、と。

神の名を真実をもって唱える者へ

この教えを聞いていた弟子たちの中にいたはずのペトロは、鶏が鳴く前に3度「イエスを知らない」と言った、その3度目には、呪いの言葉さえ口にしながらか、誓ったのです。主イエスと湖畔で出会い、枕するところもない旅を苦楽を共にし、食卓を囲んではその教えに心燃やし、キリストの涙も笑いも、祈りも汗も間近かに分かつ歩みをしてきたことを「知らない」と、真実を曲げて、事実を歪曲して、虚偽を証しし、神の名を呪いをもって汚してしまった。そのペトロのためにも主は、十字架で贖いと赦しを示されたのです。そして3日目

に墓に駆け込んできたペトロに、空（から）の墓をもって復活を告げられ（ヨハネ福音書）、真実の証し人として立て、十字架と復活の福音を語り、神の名をみだりにではなく、真実に唱えるものとしてくださったのです。

5. 安息日

陸上競技や運動選手がアクティヴレスト（積極的休養）という仕方で使った筋肉を休めると聞いたことがあります。練習や競技の後に疲労がたまった体や筋肉をただ動かさないで休めたり、そのままにしておくと、乳酸がたまってケガの原因にもなるというのです。ですから、むしろ積極的に動いて蓄積した疲れに新しい血流を促してリフレッシュして次の日、また次の試合に備えるというのです。安息日というのは、何もしない日ではないのです。むしろ魂を開いて、心を動かして、胸いっぱい神様の息吹を吸い込んで、耳を傾けて、目を上げて、旧新約聖書が証しする神様の御業を思い起こし、神様が造ってくださった「**神の似姿（かたち）**」である人間の本来のあり方を回復するための、そしてイエス様が約束してくださった新しい生命への一歩を積極的に刻む日といえるでしょう。

出エジプト記と申命記の「**安息日**」についての言葉を比べてみると、大事なことに気づかされるのです。「**安息日を守ってこれを聖別せよ**」という**申命記**の方は、その日が神様の安息日だから、どんな仕事もしないし、家にいるすべての人も家畜もしない、そのことを守るというのです。そして、この日に、そのことを通して思い起こすのは、救いの出来事だ、と。かつて奴隷であったものを、神である主が、力ある御手と御腕を伸ばして、導き出され、奴隷の縄目から解かれた救いを思い起こすのだ、と。そのために「**安息日を守る**」のだ、と。そもそも申命記は、これから深い河を渡って約束の地で、新しい信仰の共同体を作ってゆくにあたっての青写真のように語られていますので、救いに与ったもの達が形作ってゆく社会は、救いを思い起こすために「**安息日**」を守る社会なのだ、と。

出エジプト記の方では、「安息日を覚えて、これを聖別しなさい」となっていて、思い起こすのは、遡って天地創造の御業なのです。主が天と地と海と被造物すべてを造られて7日目に休まれ、その日を「祝福して聖別された」から、そのことを「覚える（心に留める、思い出す）」というのです。出エジプト記の十戒の方は、闇夜に貫かれる“光”、海を押し返す“風（霊）”、紅海（葦の海）が割かれて、“水が分かれた”て、“乾いた所”を歩みゆく出来事後、荒れ野にて与えられたものとして語られています。この出来事が創世記1章と重なり合っていることは、マークを付けた共通の単語からも確かなことですので、混沌の力と戦われて、導かれる神の御業を「覚える」ことが安息日には求められているのです。

「安息日」は、ただ何もしない日ではなくて、普段していることを止める。大人ならば営利活動、商売、労働から一旦距離をとるように、子どもたちも自分を豊かにする学びや遊びから目を転じて、その豊かさの源泉、さらには自らの魂の原点に目を留めるために、一旦ルーティンに追われる生活をリセットして、自然の流れを断ち切って、神の似姿（かたち）として造られた人であることを思い起こし、何によって生き、また死ぬのかを立ち止まって、顧みて、正気を取り戻し、さらに神がその独り子を賜るほどに愛された世に生きる者として互いに重んじる社会に生きているかどうかを確かめながら、そうでないならばそうあるように、生命と自由、平等と正義を回復するために、本当に人間らしい生活を誰もが送ることができるように心を傾けて、**地の塩、世の光**として生きるものとされ、「御国を来たらせたまえ」との祈りを新たにされる日と言えるでしょう。安息日が行動を縛るためではなくて「人のために定められた」と主イエスがマルコ2:23-28でおっしゃったのは、そういうことだと言えます。

そして主イエスが、ご自身こそ「安息日の主でもある」とおっしゃったのは、マルコ福音書全体を通して証しされ、明らかにされることなのです。安息日を巡っては、直後の3章冒頭でも主イエスが、手の萎えた人を癒されたことから、主イエスを亡きものにしようという相談が始まり、十字架へと至ることになります。金曜日に十字架につけられ、死んで葬られ、安息日であった土曜

日に、主イエスは陰府に降られました。神の御業がなされることもなく、神を賛美することもない、とされていた陰府にまで主イエスは、安息日の土曜日に降られて、そこをも“神共にいます”ところとされて、週の初めの日である日曜日に復活させられたことで、究極の救いの御業がなされたことを新約聖書は証します。死と陰府という深い河の向こうに、闇を裂いて3日目の朝日の光の中に、新しい命の約束を成し遂げられた御業。そしてその御業に生かされ、受けたことを伝える新しい共同体である教会は、主の復活の日曜日を安息日として「覚え」「守る」ものとされたのです。

毎週日曜日の朝に行われる礼拝は、「安息日の主」であるイエス・キリストの復活（イースター）を思い起こし、喜ぶ時として、2000有余年、世界中の教会で守り続けられてきました。一週の初めに、イエス・キリストの十字架と復活によって、的はずれな生き方（罪）の縄目から救い出され、死に至る空しさから新しい命を仰ぎ見る望みを新たにされて、一週間を踏み出すものとされています。週の初めに、胸いっぱい清涼な空気を吸って、身も心もリフレッシュするように、神の息吹を魂に満たして人生の歩みを整えてゆくものとされているのです。

アスリートが定められた試合の日に向けて、ベストな状態へと自らを整えていくかのように、ある年配の教会員が多くの困難や不調を身に抱えながらも、日曜日に向けて身を整え、万全の準備をして、静かに礼拝に座っておられる姿に触れることがあります。もちろん周囲の方々の理解と協力があることではありますが、内なる人が日々新たにされる礼拝者の後ろ姿を見ながら、襟を正される思いを新たにいたします。礼拝を通してキリストのみ言葉をいただき、味わい、噛みしめ、それが血肉とされて、主の日ごとに内なる人が新たにされてゆく歩みを「安息日」は確かなものとし、キリストに連なる枝として豊かな実を結ぶものへと整えてゆくのです。訪れる新しい週の歩みに備えて、そして究極的には再び来たり給う主とお会いする終わりの日の完成を目指して。

6. 父と母を敬え

「父と母を敬いなさい」は、十戒のほぼ中央に位置しています。聖書の語る
ところでは「十戒」は2枚の石の板に記されていたとありますので（出エジブ
ト32:15-16、34:1）、考え方によっては10の言葉のうち、第1の言葉から第5
の言葉までを1枚目、第6の言葉以降を2枚目の板に、分けて記していたとも
想像されます。1枚目には神を愛すること（垂直次元の信仰）、そして2枚目には
隣人を愛すること（水平次元の倫理）が纏められている、と理解されてもき
ました。イエス・キリストも聖書の教えの中で最も重要なものは何か？と問わ
れて「神である主を愛すること」が最も重要な第一の掟であり、第二もこれと
同じように重要で「隣人を自分のように愛すること」と言われ、旧約聖書はこ
の2つに基づいている、と教えられました（マタイ22:34-40。19:18も参照）。

「父と母を敬いなさい」という言葉は、どちらかと言えば、神を愛すること
というよりも隣人を愛すること（倫理）に分類された方がしっくりくるような
気もいたします。さらに「あなたの父と母を敬いなさい」という言い方は、こ
のひとつ前の「安息日を心に留め（守り）、これを聖別せよ」と同じように、
肯定的な言葉になっていることから、そもそも単純に5つずつ1枚目、2枚目
と分けられないのではないか、という考え方も出てきて当然かもしれません。
ただ、この第5の言葉を、それでも十戒の一枚目の板に記された「神を愛する
こと」を語る中の一つとして聞くことの意味深さに思いを寄せたいのです。

父母を「敬う」という言葉は、単純明快で説明するまでもないように思われ
ますが、聖書の中に置かれると、私たちがまず思い浮かべる印象とやや違った
独特な意味をまとうようになります。まず、「敬う」と訳されている元の言葉
は、父と母を「重んじる、重いものとする」さらには、「栄光を帰する」とい
う意味さえあるほどの特別なものとして響いているのです。これは、旧約聖書
では通常、神様や権威を持つ人に対して使われる言葉づかいです。神の愛と慈
しみに対する応答が、この「栄光を帰する」ことだと詩編は証しするほどなの

です。

「苦難の日に、わたしを呼べ。わたしはあなたを救う。

そしてあなたは私に栄光を帰するでしょう」(詩50:15、私訳)、と。

神と同じ様に、親を重い者とする、栄光を帰する、ということ、それはただ大事にしなさい、とか、配慮しなさい、とか、敬老という意味で老いた親を尊崇の念をもって面倒を見なさい、ということを超えた中身を含んだものと言えるでしょう。老いていても、そうでなくても、衰えて弱ってしようと、そうでなかろうと、極端なことを言えば、たとえ若い親であろうが、親を神に栄光を帰するのと同じように重んじる、というのがここでの意味なのです。

なぜか。それは聖書において親というのは、家庭の中であって、家族の間では、神の代理として神の意志を子どもたちに媒介する者、受けた救いを子どもに伝える器だから、という理解なのです。神との出会いを、出会って受けた神の愛を、そして人生を通して刻まれた神の教えを、子どもの世代へと引き継ぐのが親の務めだから、と。「父母は神の恵みの通り道」と言った人もいます。

私の父は牧師であり、神学校で旧約聖書を教えていたのですが、29年前にクモ膜下出血で逝去する半年前、高校生だった私の妹が4人兄弟の中では最後に教会で自らの信仰を告白してクリスチャンとなった日の晩にホッとしたように、「これで親の役割の大半は終わったよ」と笑顔で言ったのを思い出します。神の恵みの通路としての親の務めは、それ自体どんなに重いものであるかを日々思わされています。

ですから、この第5の言葉は、有無を言わずに親なるものを敬うことを強制するための言葉ではないのです。ただむやみに何でもかんでも、子どもは親の権威に服従し、横暴があっても耐え忍び、耐えがたきを耐えよ、といっているのではないのです。父、母を尊重するのは、ただ一点、神の恵みを伝える器として、正しい権威を指し示すものとして、その親の重みを受け止めるということと言えます。

鬱屈した心のやり場を持たずして、子どもを暴力的にして死に追いやってしまった親がおり、助けを求める術も手立ても見出しえない不幸な中で、疲れ

果てた親に放置されて小さい命枯れ果て、何年もたってから発見される子どもの悲惨がある、だれも看取り手もないまま子どもたちから忘れ去られて孤独の内に生涯を終える親がいる。それぞれの悲惨は、掘り下げてゆけば、ただ鬼畜のような親を責め、薄情な子を咎めて終わらないことに気づかされます。親子を取り巻く環境の厳しさに親となること自体を放棄し、家族の物語が失われてゆく悲しみを抱えた社会があります。大いなる救いの物語の中に自らを見出すことのできない時、断片化された個々の小さくまとまった人生物語の中で、未熟さやいら立ちや孤立が、人の人格を蝕んでゆき、それが破綻して崩壊してゆく人間の姿に露わになる。子を死に追いやることで自らの未来を喪失し、親を見捨てることで自らの過去を失う。

そこにこそ今日の言葉は問いかけるのです。父母を重んじること、それは神の救いの歴史の内に自らを見出すことではないか、と。単に生物学的な命を受け取っただけではなく、親を通し、そのまた親を通し、連綿と受け継がれてきた魂の物語を、救いの物語を生き、自らが親として子どもの世代にこの命のリリースをつないでゆく務めを担わされていることを思い起こさせるのです。

ただ、この重みに、栄光ある務めに耐えうる親がいるのか。そのような問いも出てきます。重んじられる親の世代の生き方を自分は家族の中で、また社会にあってしているかと。エフェソ6:1～4で、前半部分は子どもたちに対して、「**主**にあって、**両親に従いなさい**」と今日の第5の言葉を引きながら子どもに対して勧めがなされています。そして4節では、「**父親たち**」と親世代に向けて語りかけられています。「**子どもを怒らせてはなりません。主がしつけ諭されるように、育てなさい**」と。

神がなさるしつけと諭し、イエスキリストの教えの御業の中で子どもたちを育てることを勧められます。「父母を敬いなさい」というのは、子どもたちだけに言われているのではなく、むしろ敬われる父、母に対して、その重みに、イエスキリストの教育に連なる栄光ある務めにふさわしいものとなることを促す言葉でもあることがわかります。家庭の中にあつては子どもに、社会にあつては子どもの世代に、親、そして親の世代は、神の救いの物語を、大いなる恵

みの出来事を証しする栄えある、そして重い務めが託されている。断片化し、過去も未来も見失って今を彷徨う子どもたちの世代を受け止める父であり、母であることが求められているのです。

教会では、肉親がいる人でも、いない人でも、互いがイエスキリストを信じる信仰によって結びあわされた父であり、母であり、子であり、孫であり、キリストの食卓を囲む家族、ファミリーの一員であると、そう考えるのです。血のつながりはなくとも、地域のつながりがなくても、教会は信仰のつながりによる家族なのです（マタイ12:46以下）。血を分けた子がいなくても、一人住まいであっても、イエス・キリストが指して言われる、この場所にあって、天の父の御心を行う人たちの群れの中で、だれかの信仰の父となり母となり、叔父となり伯母となる。神の家族の中にあって、神の救いの証し人として、大いなる物語の語り手として、神の代理としての父母の務めが一人一人に託されています。主イエス・キリストが招き入れてくださった神の家族の中にあって、子どもたち、そして後の世代に、わたしたちは何者であるか、何を拠り所とし、何のために生き、何のために死ぬのか、いのちの確かな礎がどこにあるのか、人生の真の慰めと喜びを語り伝える務めを委ねられている幸いを噛みしめることへと、この「父と母を敬いなさい」という言葉は聞く者たちを導くのです。